

**IBM Business Monitor Development Toolkit**



## **インストール・ガイド**

*バージョン 7.5.0*



**IBM Business Monitor Development Toolkit**



## **インストール・ガイド**

*バージョン 7.5.0*

## ご利用条件

これらの資料は、以下の条件に同意していただける場合に限りご使用いただけます。

**個人使用:** これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、非商業的な個人による使用目的に限り複製することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずに、これらの資料またはその一部について、二次的著作物を作成したり、配布 (頒布、送信を含む) または表示 (上映を含む) することはできません。

**商業的使用:** これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、お客様の企業内に限り、複製、配布、および表示することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずにこれらの資料の二次的著作物を作成したり、お客様の企業外で資料またはその一部を複製、配布、または表示することはできません。

ここで明示的に許可されているもの以外に、資料や資料内に含まれる情報、データ、ソフトウェア、またはその他の知的所有権に対するいかなる許可、ライセンス、または権利を明示的にも黙示的にも付与するものではありません。

資料の使用が IBM の利益を損なうと判断された場合や、上記の条件が適切に守られていないと判断された場合、IBM はいつでも自らの判断により、ここで与えた許可を撤回できるものとさせていただきます。

お客様がこの情報をダウンロード、輸出、または再輸出する際には、米国のすべての輸出入関連法規を含む、すべての関連法規を遵守するものとします。

IBM は、これらの資料の内容についていかなる保証もしません。これらの資料は、特定物として現存するままの状態を提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任なしで提供されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

**原典:** IBM Business Monitor development toolkit  
Installation Guide  
Version 7.5.0

**発行:** 日本アイ・ビー・エム株式会社

**担当:** トランスレーション・オペレーション・センター

第1刷 2011.6

© Copyright IBM Corporation 2011.

---

## 第 1 章 ツールキットのインストールおよび除去

IBM® Business Monitor Development Toolkitは、ウィザード、ライブラリー、およびテスト環境を提供し、ユーザーのモニター・モデルの作成およびテストをサポートします。Business Monitor Development Toolkit は、既存の Rational® Application Developer 環境または IBM Integration Designer 環境にインストールします。

Business Monitor Development Toolkit を構成する主なコンポーネントは、次の 2 つです。

- 開発環境
- テスト環境

開発環境には、モニター・モデル・エディターとデバッガーが用意されています。モニター・モデル・エディターを使用すると、新規にモニター・モデルを作成したり、WebSphere® Business Modeler から予備モニター・モデルをインポートしたりできます。IBM Integration Designer で開発ツールキットを使用している場合は、Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus アプリケーションからモニター・モデルを生成できます。モニター・モデル・エディターを使用すると、生成またはインポートしたモニター・モデルを拡張および詳細化することができます。デバッガーを使用すると、モニター・モデルのテスト中に見つかった問題をトラブルシューティングしたり、またはモニター・モデルでどのように情報が収集されるかを理解したりすることができます。

テスト環境には、Business Space を含む、完全な Business Monitor サーバーが含まれています。

テスト環境を使用して、モニター・モデルをサーバーにデプロイし、データを Business Space に表示することができます。テスト環境は、以下の作業もサポートします。

- 迅速な繰り返し型開発を促進する (リパブリッシュ・サポートを使用)。
- テスト・イベントを作成して発行できるようにする。

### 重要:

- モニター・モデルのデプロイに使用する予定のサーバーと同じバージョンの開発ツールキットを使用する必要があります。例えば、モニター・モデルの作成に Business Monitor Development Toolkit 7.5 を使用している場合は、Business Monitor サーバー 7.5 を使用してモデルを実稼働環境にデプロイする必要があります。

このインストールおよび削除の情報は、Business Monitor Development Toolkit を Rational Application Developer にインストールする場合についての説明です。Toolkit を IBM Integration Designer にインストールするには、IBM Integration Designer フィーチャーのページで「モニター・モデル・エディター」を選択してください。

Rational Application Developer へのインストールを続行する前に、Business Monitor Development Toolkit DVD またはダウンロード可能イメージを用意しておく必要があります。ダウンロード可能イメージを使用する場合は、ファイルを一時ディレクトリーに抽出する必要があります。

---

## インストールの計画

Business Monitor Development Toolkit は Windows オペレーティング・システム上で作動し、Rational Application Developer 8.0.2 が必要です。

最新のソフトウェア要件およびハードウェア要件については、『IBM Business Process Manager システム要件』を参照してください。

### 非管理ユーザーの考慮事項

非管理ユーザーまたは非 root ユーザーとして Business Monitor Development Toolkit をインストールする場合は、Business Monitor Development Toolkit インストールを開始する前に、DB2 をインストールする必要があります。

非管理ユーザーとしてインストールする場合、以下の中から選択できます。

- Business Monitor Development Toolkit をインストールする前に、DB2 サーバーを別個にインストールする。非管理ユーザーまたは非 root ユーザーとして DB2 をインストールする方法については、『DB2 サーバー製品のインストールに必要なユーザー・アカウント (Windows)』を参照してください。
- 管理者としてログオンし、Business Monitor Development Toolkit インストーラーを使用して DB2 サーバーを単独でインストールする。非管理ユーザーに特別な権限を付与します。その後、非管理ユーザーとしてログオンして、インストール済みの DB2 サーバーを使用して Business Monitor Development Toolkit をインストールします。

### テスト環境

Business Monitor Development Toolkit インストールには、IBM Business Monitor テスト環境も含まれています。ローカル・テスト環境またはリモート・テスト環境を使用できます。リソース (CPU、メモリー、ディスク・スペース) が制約されているシステムを使用する開発者には、プロセスおよびモニター・モデルをテストするためのリモート・テスト環境を構成し、テスト・サーバーがそのリモート環境を指すように設定することをお勧めします。

IBM Business Monitor サーバーがローカルにインストールされている場合、Rational Application Developer がそのサーバーを検出して「サーバー」ビューに表示します。サーバーがリモートにインストールされている場合は、新規サーバーを作成することによってそのサーバーをターゲットにすることができます。

1. 「サーバー」ビューで右クリックし、「新規」 > 「サーバー」を選択します。
2. 「IBM」 > 「IBM Business Monitor v7.5」を選択します。
3. リモート・サーバー・ホスト名を指定して、「次へ」をクリックします。
4. プロファイル名、接続情報、およびセキュリティー情報を指定して、「終了」をクリックします。

リモート・サーバーに関する通信問題 (リモート・サーバーへの公開時や、サーバー状況の取得時の問題など) がある場合は、『リモート・サーバーに関する通信問題の解決』を参照してください。

---

## Rational Application Developer へのツールキットのインストール

IBM Business Monitor Development Toolkit を既存の Rational Application Developer 環境にインストールできます。Business Monitor Development Toolkit は、Windows の場合にのみ使用できます。

このインストールおよび削除の情報は、Business Monitor Development Toolkit を Rational Application Developer にインストールする場合についての説明です。Toolkit を IBM Integration Designer にインストールするには、IBM Integration Designer フィーチャーのページで「**モニター・モデル・エディター**」を選択してください。

Rational Application Developer にインストールする前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- Rational Application Developer 8.0.2 をインストールしておく。
- そのインストールの一部として、Rational Application Developer フィーチャー「**WebSphere Application Server バージョン 7.0 開発ツール**」フィーチャーを選択した。

次のいずれかの方法で、開発ツールキットを Rational Application Developer にインストールできます。

- Business Monitor Development Toolkit 製品ランチパッド・プログラムの使用
- 既存の IBM Installation Manager の使用
- サイレント・インストール方式の使用

いずれかのインストール方式での開発 Toolkit のインストールの詳細説明については、次のいずれかのオプションを選択してください。

### 製品ランチパッド・プログラムを使用して Toolkit を Rational Application Developer にインストールする

インストール・イメージのルート・ディレクトリーから使用できる製品ランチパッド・プログラムを使用して、Business Monitor Development Toolkit を既存の Rational Application Developer 環境にインストールすることができます。ランチパッド・プログラムには、ご使用の環境に適切なオプションを選択する、対話式インストールが用意されています。

Rational Application Developer にインストールする前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- Rational Application Developer 8.0.2 をインストールしておく。
- そのインストールの一部として、Rational Application Developer フィーチャー「**WebSphere Application Server バージョン 7.0 開発ツール**」フィーチャーを選択した。

**重要:** 非管理ユーザーまたは非 root ユーザーとしてテスト環境で Business Monitor Development Toolkit をインストールする場合は、そのインストールを開始する前に DB2 をインストールする必要があります。

**重要:** Business Monitor Development Toolkit を Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 上でインストールまたは実行するには、launchpad.exe を右クリックし、「管理者として実行」を選択して、ご使用の Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を昇格する必要があります。これは、管理ユーザーと非管理ユーザーの両方に必須です。

製品ランチパッド・プログラムを使用して Business Monitor Development Toolkit をインストールするには、次の手順を実行します。

1. 最初の IBM Business Process Manager DVD を DVD ドライブに挿入します。
2. システムで自動実行が使用可能な場合は、IBM Business Process Manager Launchpad プログラムが自動的に開きます。システムで自動実行が使用可能になっていない場合は、DVD のルート・ディレクトリーにある launchpad.exe か、64 ビット・システムの場合は launchpad64.exe を実行します。
3. Administrator グループに属している場合、「管理ユーザーとしてインストール」が選択されていることを確認します。このチェック・ボックスをクリアするのは、自身が管理ユーザーではない場合、または他のユーザーに特権を付与せずに自身のユーザー名にインストールする場合のみです。
4. 「インストール」をクリックして、インストールを開始します。IBM Installation Manager が起動するか、インストールされた後に起動します。
5. 『IBM Installation Manager によるインストール』の指示に従い製品をインストールします。

## IBM Installation Manager によるインストール

Installation Manager を使用して、Business Monitor Development Toolkit を Rational Application Developer 環境に対話的にインストールできます。

Rational Application Developer にインストールする前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- Rational Application Developer 8.0.2 をインストールしておく。
- そのインストールの一部として、Rational Application Developer フィーチャー「**WebSphere Application Server バージョン 7.0 開発ツール**」フィーチャーを選択した。

**重要:** 非管理ユーザーまたは非 root ユーザーとしてテスト環境で Business Monitor Development Toolkit をインストールする場合は、そのインストールを開始する前に DB2 をインストールする必要があります。

ランチパッドを使用してこの製品をインストールする場合、Installation Manager は自動的に起動および構成されるため、ステップ 2 に直接進んでかまいません。

1. オプション: ランチパッドからインストールしない場合は、以下のステップを実行します。



- a. 「スタート」 > 「すべてのプログラム」 > 「IBM Installation Manager」 > 「IBM Installation Manager」をクリックして Installation Manager を開始します。

注: Installation Manager の新しいバージョンが見つかった場合は、続行するにはそのバージョンのインストールが必要であることを確認するためのプロンプトが出されます。「OK」をクリックして続行します。Installation Manager の新規バージョンのインストール、再始動、および再開が自動的に行われます。

- b. リポジトリ・ロケーションを定義します。「ファイル」 > 「設定」をクリックして「Installation Manager の設定」ページを開きます。
  - c. 「リポジトリの追加」をクリックして、新しいリポジトリのロケーションを追加します。リポジトリ・ロケーションは、*image\_directory/disk1/IMmontk75/repository.config* (Business Monitor Development Toolkit の場合) および *image\_directory/WTE\_Disk/repository/repository.config* (テスト環境の場合) です。ここで、*image\_directory* には、Business Monitor Development Toolkit の解凍済みインストール・イメージが入ります。
  - d. 「参照」をクリックして、リポジトリのロケーションを参照します。「OK」をクリックします。新しいリポジトリのロケーションが、リポジトリ・リストに追加されます。
  - e. 「リポジトリの構成 (Repositories configuration)」ページの「OK」をクリックして設定を保存し、「設定」ページを終了します。
  - f. Installation Manager の「開始」ページで、「インストール」をクリックします。
2. インストールする Business Monitor Development Toolkit パッケージとパッケージに対する更新が選択されていることを確認します。依存関係がある更新は、自動的に一緒に選択またはクリアされます。以下のパッケージが選択されます。
    - IBM Cognos Business Intelligence (管理ユーザーでない場合は、このチェック・ボックスをクリアしてください)
    - WebSphere Application Server - ND (パッケージがインストール済みの場合は、このチェック・ボックスをクリアしてください)
    - DB2 Express (DB2 データベースがインストール済みの場合、または管理ユーザーでない場合は、このチェック・ボックスをクリアしてください)
    - IBM Business Monitor
    - Business Monitor Development Toolkit
  3. 「ライセンス」ページで、選択したパッケージのご使用条件を読みます。

インストールするパッケージを複数選択すると、パッケージごとにご使用条件がある場合があります。「ライセンス」ページの左側で、ご使用条件を表示する各パッケージのバージョンをクリックします。インストールするように選択したパッケージのバージョン (例えば基本パッケージと更新) が、パッケージ名の下にリストされます。

- a. すべてのご使用条件に合意する場合は、「使用条件の条項に同意します」をクリックします。
- b. 「次へ」をクリックして先に進みます。

4. 「ロケーション」 ページで、Rational Application Developer パッケージが入っている **package\_group** をクリックします。 選択したパッケージ・グループが、Toolkit の必須の前提条件を満たさない場合は、エラーが表示されます。
  - a. テスト環境を作成する場合は、テスト環境のデフォルト・パスを変更できません。「**WebSphere Application Server - ND**」を選択し、テスト環境のパスを入力します。
  - b. 「次へ」 をクリックして先に進みます。
5. 「フィーチャー」 ページで、インストールするパッケージ・フィーチャーを選択します。選択しなかった場合、インストール可能なフィーチャーとして表示されません。
  - a. オプション: フィーチャー間の依存関係を表示するには、「**依存関係の表示**」を選択します。
  - b. オプション: フィーチャーをクリックすると、「**詳細**」に要旨が表示されます。
  - c. パッケージ内のフィーチャーを選択またはクリアします。Installation Manager によって自動的に他のフィーチャーとの依存関係が適用され、更新されたダウンロード・サイズとインストールのディスク・スペース要件が表示されます。
    - 1 つ以上のスタンドアロン開発プロファイルを選択すると、インストール中にプロファイルが作成されます。ユーザーが選択したオプションに基づいて、プロファイルがすでに選択されている場合もあります。

スタンドアロン開発プロファイルは、IBM Business Monitor テスト環境を提供するデフォルトの開発プロファイルです。デフォルトのスタンドアロン開発プロファイルをインストールしないように選択しても、Installation Manager を起動して、最初のページで「**変更**」をクリックすると、後からインストールすることができます。

- d. フィーチャーの選択が終了したら、「次へ」 をクリックして続行します。
6. 「プロファイル」 ページで、作成するスタンドアロン・プロファイルおよびテスト・サーバーの資格情報を入力します。デフォルトのユーザー名は **admin**、デフォルトのパスワードは **admin** です。
  7. DB2 Express を選択した場合は、「共通構成」 ページで、DB2 のユーザー名とパスワードを入力し、「次へ」 をクリックします。デフォルトのユーザー名は **bpmadmin**、デフォルトのパスワードは **bpmadmin1** です。

**重要:** デフォルトのパスワードがご使用のオペレーティング・システム (例えば Windows 2008) のパスワード・ポリシーに準拠していない場合、パスワードを変更する必要があります。

**制約事項:** ユーザー名に NL ストリングを含めることはできません。

8. IBM Business Process Manager Advanced パッケージをインストールする前に、「要約」 ページで、行った選択を検討します。これまでのページで行った選択を変更するには、「戻る」 をクリックして変更します。インストールの選択項目が希望どおりになったら、「**インストール**」 をクリックしてパッケージをインストールします。進行標識で、インストールの完了率が示されます。

9. インストール・プロセスが完了すると、プロセス正常終了の確認メッセージが表示されます。
  - a. 「ログ・ファイルの表示」をクリックし、現行セッションのインストール・ログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。続行するには、インストール・ログのウィンドウを閉じる必要があります。
  - b. テスト環境のインストールを選択したかどうかに応じて、終了時にプロファイルを作成するオプションが表示される場合があります。インストールの一部としてスタンドアロン・プロファイルを既に作成している場合は、「なし」を選択します。
  - c. 「終了」をクリックして **Installation Manager** を閉じます。

## サイレント・インストール

**Business Monitor Development Toolkit** をサイレント・インストール・モードで既存の **Rational Application Developer** 環境にインストールできます。サイレント・モードでインストールするときは、ユーザー・インターフェースは使用できません。代わりに、製品をインストールする応答ファイルを使用するコマンドを実行します。

**Rational Application Developer** にインストールする前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- **Rational Application Developer 8.0.2** をインストールしておく。
- そのインストールの一部として、**Rational Application Developer** フィーチャー「**WebSphere Application Server バージョン 7.0 開発ツール**」フィーチャーを選択した。

**重要:** 非管理ユーザーまたは非 root ユーザーとしてテスト環境で **Business Monitor Development Toolkit** をインストールする場合は、そのインストールを開始する前に **DB2** をインストールする必要があります。

**重要:** **Business Monitor Development Toolkit** を **Windows 7**、**Windows Vista**、または **Windows Server 2008** 上でインストールまたは実行するには、**launchpad.exe** を右クリックし、「管理者として実行」を選択して、ご使用の **Microsoft Windows** ユーザー・アカウントの特権を昇格する必要があります。これは、管理ユーザーと非管理ユーザーの両方に必須です。

**Business Monitor Development Toolkit** をサイレント・インストールするには、以下のステップを実行します。

1. インストール前にライセンス条項を読んで同意します。`-acceptLicense` を応答ファイルに追加することは、すべてのライセンス条項に同意したことを意味しません。
2. **Business Monitor Development Toolkit** をインストールする応答ファイルを作成します。以下のディレクトリーにあるサンプル応答ファイルをコピーし、独自の応答ファイルを作成します。

```
dvd_root/disk1/responsefiles/responsefile.install.xml
```

3. 応答ファイル・テンプレートのテキストの指示に従ってパラメーターを変更し、独自の応答ファイルを作成します。応答ファイルは、**Installation Manager** でアクションを記録することによっても作成できます。応答ファイルを記録すると、**Installation Manager** で行った選択が **XML** ファイルに保管されます。**Installation**

Manager をサイレント・モードで実行すると、Installation Manager は XML 応答ファイル内のデータを使用してインストールを実行します。

**重要:** サンプル応答ファイルの先頭にあるリポジトリ・ロケーションが、ご使用の環境内の正しい場所を指していることを確認してください。

4. 次のコマンドを実行します。

管理者としてインストールするには、以下を実行します。

```
extract_location%IM%installc.exe -acceptLicense input dvd_root%disk1%responsefiles%responsefile.i
```


非管理者としてインストールするには、以下を実行します。

```
extract_location%IM%userinstc.exe -acceptLicense input dvd_root%disk1%responsefiles%responsefile.
```

Installation Manager により、必要なすべての前提条件および Business Monitor Development Toolkit がインストールされ、指定したディレクトリにログ・ファイルが書き出されます。

#### 関連情報

 [Installation Manager によるサイレント・インストール](#)

 [Installation Manager による応答ファイルの記録](#)

---

## 開発ツールキットの除去

IBM Installation Manager を使用することによって、Business Monitor Development Toolkit をコンピューターから除去できます。IBM Installation Manager では、対話方式とサイレント方式の両方をサポートします。

開発ツールキットをアンインストールするには、事前に以下の作業を完了しておく必要があります。

- WebSphere MQ Workflow 用 FDL to Monitor Model ユーティリティー を Rational Application Developer からアンインストールする

プラグインのアンインストール方法の説明については、10 ページの『WebSphere MQ Workflow 用 FDL to Monitor Model ユーティリティーの除去』を参照してください。

次のいずれかのオプションを選択して、ワークステーションから Toolkit を削除します。

## 関連タスク

10 ページの『WebSphere MQ Workflow 用 FDL to Monitor Model ユーティリティの除去』

Business Monitor Development Toolkit を除去する必要がある場合は、まず Integration Designer または Rational Application Developer から FDL to monitor model ユーティリティを除去する必要があります。そうしない場合は、警告メッセージが複数表示されます。

## IBM Installation Manager 対話方式でのツールキットの除去

IBM Installation Manager 対話方式を使用して、コンピューターから Business Monitor Development Toolkit を除去します。対話方式では、除去するパッケージを選択できるインターフェースが用意されています。

IBM Installation Manager 対話方式で開発ツールキットを除去するには、次の手順を実行します。

1. Installation Manager を使用してインストールしたプログラムを閉じます。
2. 稼働中のサーバーをすべて停止します。
3. Installation Manager を始動します。「開始」ページで、「アンインストール」をクリックします。
4. 「パッケージのアンインストール」ページで、IBM Business Process Manager Advanced および関連するパッケージを選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「要約」ページで、アンインストールされるパッケージのリストを確認し、「アンインストール」をクリックします。アンインストールが終了すると、「完了」ページが開きます。
6. 「終了」をクリックしてウィザードを終了します。

## IBM Installation Manager サイレント方式でのツールキットの除去

IBM Installation Manager サイレント方式を使用して、コンピューターから Business Monitor Development Toolkit を除去します。サイレント方式では、提供された応答ファイルをカスタマイズし、コマンド行からバッチ・ファイルを実行してツールキットを除去することができます。

IBM Installation Manager サイレント方式で開発ツールキットを除去するには、次の手順を実行します。

1. ツールキット・インストール・イメージのディレクトリーに移動します。
2. responsefile.uninstall.xml ファイルのコピーを作成します。

また、製品アンインストール用のサンプル応答ファイルも、解凍されるインストール・イメージに次のファイル名で含まれています。

- `extract_directory%disk1%responsefiles%responsefile.uninstall.xml`

製品 DVD では次のファイル名で提供されています。

- `DVD_root%disk1%responsefiles%responsefile.uninstall.xml`

3. responsefile.uninstall.xml のコピーを開き、次の変数を正しい値に置き換えます。

(*PACKAGE\_GROUP\_NAME*), (*PRODUCT\_INSTALL\_DIR*)

4. ファイルを保存して閉じます。
5. コマンド・プロンプトから、IBM Installation Manager のインストール・ディレクトリーに移動します。例えば、以下のように入力します。

```
cd C:\Program Files\IBM\InstallationManager\ eclipse\ tools
```

6. 次のコマンドを実行依頼します。

```
imcl.exe input  
dvd_root\disk1\responsefiles\responsefile.uninstall.xml -log  
preferred_log_location\silent_install.log
```

アンインストール処理が完了したら、エラーが発生しなかったことをログ・ファイルで確認します。ログ・ファイルは、IBM Installation Manager のログ・ディレクトリーにあります。Windows オペレーティング・システムでは、ログ・ファイルは次のディレクトリーにあります。

```
C:\Documents and Settings\All Users\Application Data\IBM\Installation  
Manager\logs
```

## WebSphere MQ Workflow 用 FDL to Monitor Model ユーティリティーの除去

Business Monitor Development Toolkit を除去する必要がある場合は、まず Integration Designer または Rational Application Developer から FDL to monitor model ユーティリティーを除去する必要があります。そうしない場合は、警告メッセージが複数表示されます。

Integration Designer または Rational Application Developer からユーティリティーを除去するには、以下の手順を実行します。

1. 「ヘルプ」 > 「ソフトウェア更新」 > 「構成の管理」をクリックします。
2. ツリーを展開して、「**FDL to Monitor Model ユーティリティー機能 1.0.9**」を見つけ出し、それを選択します。
3. 「**FDL to Monitor Model ユーティリティー機能 1.0.9**」を右クリックします。メニューに、「置換」、「無効にする」、「アンインストール」、および「プロパティー」が表示されます。
4. 「アンインストール」をクリックします。

### 関連概念

8 ページの『開発ツールキットの除去』

IBM Installation Manager を使用することによって、Business Monitor Development Toolkit をコンピューターから除去できます。IBM Installation Manager では、対話方式とサイレント方式の両方をサポートします。

---

## ツールキット・インストールのトラブルシューティング

Business Monitor Development Toolkit のインストールまたは削除時に発生する可能性のある問題がいくつかあります。

「Business Monitor Support」ページの『Technotes』セクションで、最新のトラブルシューティングのヒントを見つけることができます。

## 関連情報



WebSphere Business Monitor 技術情報

## サーバーが「サーバー」ビューに表示されない

IBM Business Monitor Development Toolkit をインストールした後、IBM Business Process Manager サーバーが Rational Application Developer または Integration Designer の「サーバー」ビューに表示されます。プロファイルが作成されていたことを確認し、`-clean` パラメーターを使用して Rational Application Developer または Integration Designer を再始動してください。

1. プロファイルが `profile_root` ディレクトリーに作成されたことを確認します。
2. `-clean` パラメーターを指定して、Rational Application Developer または Integration Designer を始動します。
  - a. コマンド・プロンプトを開き、Rational Application Developer または Integration Designer がインストールされているディレクトリーに移動します。
  - b. ご使用の開発環境に応じて、以下のいずれかのコマンドを入力します。

Rational Application Developer: `eclipse.exe -clean`

Integration Designer: `wid.exe -clean`

3. それでもサーバーが表示されない場合は、『テスト環境への新規サーバーの追加』の説明に従って、新規サーバーを作成してください。

## ワークスペース・サーバー構成の手動削除

未解決のプロジェクト・リソースによる問題を避けるため、Toolkit のアンインストール後は、Business Monitor Development Toolkit ワークスペースを継続して使用しないでください。ただし、非 Toolkit プロジェクトにワークスペースを使用する必要がある場合は、まず残されている Toolkit サーバー構成をすべて除去してください。

IBM Installation Manager を使用して Business Monitor Development Toolkit を除去した場合、IBM Business Process Manager サーバーの構成は、ワークスペースに残されます。アンインストールが正常に完了した後で以下の手順を実行すると、ワークスペースから構成を削除できます。

1. 開発アプリケーションで、「ウィンドウ」 > 「ビューの表示」 > 「サーバー」を選択します。
2. 「サーバー」ビューで、環境に適用できる サーバーの構成を削除します。
3. サーバー削除の確認メッセージが表示されたら、実際に実行されているサーバーの削除に関連する項目を選択して、「OK」をクリックします。

## 関連情報

 WebSphere Business Monitor 技術情報

### 再インストール時に新規プロファイルを作成できない

製品を同じ場所に再インストールするか、アンインストールに失敗した後で再インストールしようとする、新規プロファイルを作成できないためにインストールが失敗する可能性があります。

データベースをテスト環境用に作成した場合は、新規プロファイルを作成する前に、これらのデータベースを除去する必要があります。

アンインストール時にこれらのデータベースが自動的に除去されない場合は、手動で除去する必要があります。

- qbpmaps プロファイルのデフォルト・データベースは QBPMDB、QPDWDB、QCMNDB です。
- qesb プロファイルのデフォルト・データベースは ECMNDB および QECMNDB (一方または両方) です。
- qmwas プロファイルのデフォルト・データベースは MONITOR および COGNOSCS です。
- qmbpmaps プロファイルのデフォルト・データベースは QBPMDB、QPDWDB、QCMNDB、MONITOR、COGNOSCS です。
- qmesb プロファイルのデフォルト・データベースは ECMNDB、dateQECMNDB、MONITOR、COGNOSCS です。

---

## プロジェクト交換ファイルからのモニター・モデルのインポート

以前のリリースの Business Monitor Development Toolkit のモニター・モデルが含まれているプロジェクト交換 (PI) .zip ファイルがある場合、そのモニター・モデルを Rational Application Developer または Integration Designer のワークスペースにインポートすることができます。

PI ファイルを Rational Application Developer または Integration Designer のワークスペースにインポートするには、以下の手順を実行します。

1. Rational Application Developer または Integration Designer で、「ファイル」 > 「インポート」をクリックします。
2. 「一般」を展開し、「Existing Projects into Workspace」をクリックしてから「次へ」をクリックします。
3. 「プロジェクトのインポート」パネルで、「Select archive file」をクリックし、「参照」をクリックします。PI .zip ファイルに移動して、「開く」をクリックします。「プロジェクト」ボックス内で、プロジェクトを確認することができます。
4. インポートするプロジェクトの横に必ずチェック・マークを付けます。
5. 「終了」をクリックします。



## アーカイブ・ファイルへのモニター・モデルのエクスポート

Rational Application Developer または Integration Designer のモニター・モデルをアーカイブ・ファイルにエクスポートすることができます。

Rational Application Developer または Integration Designer ワークスペースからアーカイブ・ファイルのエクスポートするには、以下の手順を実行します。

1. Rational Application Developer または Integration Designer で、「ファイル」 > 「エクスポート」をクリックします。
2. 「一般」を展開し、「アーカイブ」をクリックしてから「次へ」をクリックします。
3. 「アーカイブ・ファイル」パネルで、アーカイブ・ファイルに含めるプロジェクトのチェック・ボックスを選択します。
4. 「宛先アーカイブ・ファイル」フィールドにファイル名を入力します。「**Save in zip format**」オプションと「**Create directory structure for files**」オプションを選択するようにしてください。
5. 「終了」をクリックします。



---

## 第 2 章 ディレクトリーの規則

このトピックでは、IBM Business Process Manager 製品および製品コンポーネントにおけるデフォルトのパスおよびフォルダー名を定義します。

ご使用のファイル・パスが、製品のインストール時に決定されたデフォルトのファイル・パスと異なるため、資料ではこれらの値を変数として指定します。資料全体で使用される変数は、以下のセクションで定義されます。

### インストール・イメージ

インストール・イメージ は、製品 CD 上のファイル構造を指すか、製品 CD をコピーするか、Passport Advantage<sup>®</sup>または他の配布場所からダウンロードしたソフトウェア・パッケージを解凍することによって、ローカルに作成されたファイル構造を指します。

#### **monitor\_installation\_image**

IBM Business Process Manager のインストール・イメージを示します。

#### **toolkit\_installation\_image**

Business Monitor Development Toolkit のインストール・イメージを示します。

### デフォルトのインストール・ロケーション

ソフトウェアのインストール時に、インストール・ロケーションを指定しない場合、インストール・プログラムはデフォルトのロケーションを使用してインストールします。このロケーションは、デフォルトのインストール・ディレクトリーと呼ばれます。製品をデフォルトのディレクトリーにインストールすることもそれ以外の場所にインストールすることもある上、デフォルト・ディレクトリー構造はオペレーティング・システムによって異なっている場合があるため、これらのパスはこの資料全体で変数として定義されます。

#### **monitor\_root**

**Installation Manager** からインストールした場合、IBM Business Process Manager のデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーは以下のとおりです。

AIX<sup>®</sup>: /usr/IBM/WebSphere/AppServer

HP-UX: /opt/IBM/WebSphere/AppServer

Linux: /opt/ibm/WebSphere/AppServer

Solaris: /opt/ibm/WebSphere/AppServer

Windows: C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥AppServer

**サイレント・インストールの場合**、IBM Business Process Manager のデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーは以下のとおりです。

AIX: /usr/IBM/WebSphere/MonServer

HP-UX: /opt/IBM/WebSphere/MonServer

Linux: /opt/ibm/WebSphere/MonServer  
Solaris: /opt/ibm/WebSphere/MonServer  
Windows: C:\IBM\WebSphere\MonServer

#### **app\_server\_root**

以下のデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーは、WebSphere Application Server 用です。

AIX: /usr/IBM/WebSphere/AppServer  
HP-UX: /opt/IBM/WebSphere/AppServer  
Linux: /opt/IBM/WebSphere/AppServer  
Solaris: /opt/IBM/WebSphere/AppServer  
Windows: C:\Program Files\IBM\WebSphere\AppServer

#### **profile\_root**

**Installation Manager** からインストールした場合、WebSphere Application Server プロファイルのデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーは以下のとおりです。

AIX: /usr/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/*profile\_name*  
HP-UX: /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/*profile\_name*  
Linux: /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/*profile\_name*  
Solaris: /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/*profile\_name*  
Windows: C:\Program  
Files\IBM\WebSphere\AppServer\profiles\*profile\_name*

**サイレント・インストールの場合**、WebSphere Application Server プロファイルのデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーは以下のとおりです。

AIX: /usr/IBM/WebSphere/MonServer/profiles/*profile\_name*  
HP-UX: /opt/IBM/WebSphere/MonServer/profiles/*profile\_name*  
Linux: /opt/IBM/WebSphere/MonServer/profiles/*profile\_name*  
Solaris: /opt/IBM/WebSphere/MonServer/profiles/*profile\_name*  
Windows: C:\Program  
Files\WebSphere\MonServer\profiles\*profile\_name*

#### **portal\_root**

以下のデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーは、WebSphere Portal 用です。

AIX: /usr/IBM/WebSphere/PortalServer  
HP-UX: /opt/IBM/WebSphere/PortalServer  
Linux: /opt/IBM/WebSphere/PortalServer  
Solaris: /opt/IBM/WebSphere/PortalServer  
Windows: C:\Program Files\IBM\WebSphere\PortalServer

#### **integration\_dev\_root**

以下のパスは、Integration Designer 用のデフォルトのインストール・ディレクトリーです。

Windows: C:\IBM\IntegrationDesigner\v7.5

Linux: /opt/IBM/IntegrationDesigner/v7.5

### **app\_dev\_root**

以下のパスは、Rational Application Developer 用のデフォルトのインストール・ディレクトリーです。

Windows: C:\Program Files\IBM\SDP

## **Installation Manager 用のデフォルトのインストール・ディレクトリー**

Installation Manager は 2 つのデフォルト・ディレクトリーを使用します。1 つは、製品のランチパッドが Installation Manager をインストールするディレクトリーです。もう 1 つは、エージェント・データのロケーション・ディレクトリーです。Installation Manager は、アプリケーションと関連付けられたデータ (Installation Manager によって実行された操作のステートとヒストリーなど) にこのディレクトリーを使用します。エージェント・データのロケーションについて詳しくは、関連リンクで『エージェント・データのロケーション』を参照してください。

### **root\_installation\_directory**

以下のパスは、root ユーザーまたは管理者ユーザー用の Installation Manager のデフォルトのインストール・ディレクトリーです。

AIX: /opt/IBM/InstallationManager/eclipse

HP-UX: /opt/IBM/InstallationManager/eclipse

Linux: /opt/IBM/InstallationManager/eclipse

Solaris: /opt/IBM/InstallationManager/eclipse

Windows: C:\Program Files\IBM\Installation Manager\eclipse

### **nonroot\_installation\_directory**

以下のパスは、非 root ユーザー用の Installation Manager のデフォルトのインストール・ディレクトリーです。

AIX: *user\_home*/IBM/InstallationManager/eclipse

HP-UX: *user\_home*/IBM/InstallationManager/eclipse

Linux: *user\_home*/IBM/InstallationManager/eclipse

Solaris: *user\_home*/IBM/InstallationManager/eclipse

Windows: C:\Documents and Settings\%*userID*\IBM\Installation Manager\eclipse

### **root\_agent\_data\_directory**

以下のパスは、root ユーザーまたは管理者ユーザー用の Installation Manager のデフォルトのエージェント・データのロケーション・ディレクトリーです。

AIX: /var/ibm/InstallationManager

HP-UX: /var/ibm/InstallationManager

Linux: /var/ibm/InstallationManager

Solaris: /var/ibm/InstallationManager

Windows: C:\Documents and Settings\All Users\Application Data\IBM\Installation Manager

### **nonroot\_agent\_data\_directory**

以下のパスは、非 root ユーザー用の Installation Manager のデフォルトのエージェント・データのロケーション・ディレクトリーです。

AIX: *user\_home*/var/ibm/InstallationManager

HP-UX: *user\_home*/var/ibm/InstallationManager

Linux: *user\_home*/var/ibm/InstallationManager

Solaris: *user\_home*/var/ibm/InstallationManager

Windows: C:%Documents and Settings%*userID*%Application Data%IBM%Installation Manager

---

## 特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で、IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒242-8502  
神奈川県大和市下鶴間1623番14号  
日本アイ・ビー・エム株式会社  
法務・知的財産  
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任または保証条件は適用されないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのもと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお問い合わせください。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

#### 著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほめかしたり、保証することはできません。お客様は、IBM のアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。© Copyright IBM Corp. 2000, 2011. All rights reserved.



この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

## プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報は、プログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立ちます。

一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様はこのプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。

ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

**警告:** 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

## 商標

IBM、IBM ロゴおよび [ibm.com](http://ibm.com) は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Java およびすべてのJava 関連の商標およびロゴは Oracleやその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Microsoft および Windows は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Adobe は、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。







Printed in Japan